



【#2】 白玉のオハナシ
Text by 小助川 駒介
Komasuke KOSUKEGAWA

夫は朝食を食べながら、iPadで新聞を読んでいる。

コーヒーとトーストとゆで卵。

このメニューは何年も変わらない。

人差し指で慌ただしく画面をスクロールし、

黙々と記事を追う。

経済系の新聞記者という仕事柄、記事を読むスピードは早い。

その間話すことはほぼない。

ゆでたまごを飲み込む夫の喉が生き物のように動き、

私は目を逸らした。

「じゃ、行ってくる」

独り言のように言って夫は出て行った。

きょうも帰りは遅いだろう。

家で夕食を食べることはほとんどない。

夫が出て行った後、私は窓を全開にして、

初夏の柔らかい風を招き入れた。

「OK グーグル、『さよなら COLOR』をかけて」

スピーカーから、少し鼻にかかったような甘い歌声が
流れ出す。

私はふたつのマグカップにコーヒーを注いだ。

ミルクも、砂糖も両方だね。

と、私はさっきまで夫が座っていた食卓を見る。

そこには彼が座っていて、優しい目で私を見て頷いた。

彼は20代前半の、あの頃のままでの姿でいる。

コーヒーの入ったマグカップを挟んで、私たちは会話する。

もうすぐ夏だね。と彼が言う。

え、もう夏だよ。立夏も過ぎたから。

そうかなあ。五月は春じゃないかな。一般的に。

立夏を過ぎたら、もう夏だよ。

だって僕は俳句はやらないから。

そんな他愛もない会話で、おだやかな時間が過ぎていく。

もちろん、彼は私の想像の中にしか存在しない。

そのことは私も理解している。

ただ何年もこんなことを続けているうちに、

彼の存在は私の中で、

触れて感じられるほどのリアリティを持ち始めた。

東京と仙台の遠距離恋愛に終わりを告げたのは
私からだった。

仙台的国立大学の農学部で

菌類の情報伝達について研究する彼と

東京の女子大に通う私との間には、

徐々に物理的以上の距離が開いて行った。

決して怒ることのない、おだやかな人だった。

しかし帰省して会う時に

菌同士は微量の電気によって会話をしている、

と話す彼の話に、

私は次第についていけなくなっていた。

最後まで優しい人だった。

別れることになったその日、

車で仙台駅まで送ってくれた時に流れていたのが、

スーパーバードッグの『さよなら COLOR』だった。

私は大学を卒業し、都内の商社で働いたあと、友人の紹介で出会った今の夫と出会い、結婚した。よく笑い、よく話す人で、

彼の持つ熱量に私は惹かれていった。

結婚当初の、楽しい記憶もいくつかはある。

しかし彼は仕事柄家を空けることが多く、

土日もないような生活が続いた。

大抵の場合、夫は仕事を優先した。

ひとりで過ごす食事は、私にとって当たり前になった。

私はすこしずつ、あきらめることを学んで行った。

何も期待しなければ、がっかりすることなど

何もないのだ。

いつものように自分だけの夕食についたある夜。

あの時の彼は今どうしているのだろう、
という考えがふと浮かんた。

もしあの時別れることなく、彼と結婚していたら、
どんな生活を送っているのだろうか？

彼と私は、どんなふうに暮らしたのだろうか？

私は次第にその考えに熱中し始めた。

その後の彼がどうなっているのか、

私は何も知らなかったし、

知ろうとも思わなかった。

それは私にとってどうでもいいことだった。

私の想像の中で、彼はいつも私の話を聞いてくれた。

適切なタイミングで、適切な言葉をかけてくれた。

私たちはお互いを思いやり、親密な時間を

過ごすようになった。

食卓でのやりとり、夕暮れの街の散歩、

カウチに並んでNetflix。

彼との会話の解像度が上がっていくに連れ、

私は夫にやさしくなっていたように思う。

ある日曜日、夫が突然、たまには鎌倉に行こう、

と私をさそった。

予定もなかった私に、断る理由は何一つない。

私たちは特に目的も決めずに

初夏の光に溢れる鎌倉を歩いた。

銭洗弁天に向かう甘味処に、私たちは入った。

白玉ぜんざいをつつきながら、夫が話し始めた。

汁気が多い小豆餡に

つややかな白玉が五つ浮かんでいる。

「ずっと言おうと思っていたんだけど、

会社をやめようと思うんだ」

私もつるつるとすべらかな白玉を木の匙で掬う。

「そうなんだ」

私には、それ以上付け加えることはない。

「瀬戸内の島でね、ゲストハウスをやろうと思ってる」

白玉の表面には、窓の外の新緑の影が映っている。

「何回か見てきたんだけど、すごくいいところだよ。

きっと気に入ると思う」

出張だ、と言っていたことが何回かある。

そのときに見に行っていたのだろう。

私はすぐに自分の気持ちに蓋をした。

不用意な言葉に対して、

何も考えないことには慣れている。

ふと前を見ると、店の奥の席に彼が座って、
にこにこことこちらを見ている。

夫が不意に尋ねる。

「俺のこと、まだ好きでいてくれるかな」

私は彼を見る。彼は私に向かって深く頷く。

僕はこのままでいいんだ、そう言っているような

頷き方だ。

「うん、ずっと好きだったよ」

私はあきらかな嘘をついた。

しかしそれは、誰に対しての嘘なのか、

私にはわからない。

白玉や愛すひとにも嘘ついて
鈴木真砂女